

# テクノ進歩派の正当化論とは何か？

## ——モラル・エンハンスメントを中心に——

首都大学東京 堀内進之介

### 1 目的

この報告の目的は、薬理的なドーピングや遺伝子改良を通じて、市民のモラルをエンハンスメント（増進）する試みの正当化を目指すテクノ進歩派（techno-progressives）の議論、とりわけ世界超人協会（World Transhumanist Association）の立役者の一人であり、技術的進歩と民主的社会変革の融合を唱える James Hughes の議論の理路を検討すること、そして、それによって、モラル・エンハンスメントを危険視し、批判するバイオ保守派（bio-conservatives）の諸議論がどのような点で、十分な説得力を持ち得ていないかを指摘することにある。

（モラル）エンハンスメントは、生物学的な偶然性を選択に変える潜勢力がある故に、長らく（応用）倫理学の領分であった。しかし、部分的にはあれ、モラル・エンハンスメントの可能性が手に届くレベルで現実化し、さらに人々に実践され始めている現状においては、すでに社会的な経験や実践の自明性をも選択に変える力を発揮しつつあると言える。こうした動向を危険視するにしても、それを批判することが何を擁護することになるのか、さらに擁護するものが擁護に値すると言える根拠は何かを説得力のある形で示さなければ、有効なものにはなり得ない。そこで本報告では、モラル・エンハンスメントに対する有効な批判の可能性を探るためにこそ、テクノ進歩派の正当化論が素朴な、あるいは安易な批判を退けるに十分なものであることを示し、モラル・エンハンスメントのよりましな推進の、あるいはより可能な批判の理路を探ることを目指したい。

### 2 方法

バイオ保守派の批判に対する、テクノ進歩派からの反論を簡単に取り上げた上で、James Hughes の正当化論を紹介しつつ、それがどのような理路によって成り立っているかを検討する。

### 3 結果

James Hughes の正当化論は、以下の理路によって成り立っている。Hughes は、モラル・エンハンスメントを民主的社会変革への寄与という観点から正当化するに当たり、モラル・エンハンスメントに、少なくとも二つの条件を課しているように思われる。第一の条件は、モラル・エンハンスメントの使用基準に関わるものであり、第二の条件は、モラル・エンハンスメントの役割に関するものである。これらの条件を課した上で、モラル・エンハンスメントは、道徳性に関わる判断や認識、意志、動機、振舞など1つ以上に影響を与える可能性が確かめられている故に、人々を有徳な市民として陶冶する諸実践に寄与し、しかるに、社会民主主義を実現・維持する社会変革の諸実践に貢献し得ると主張している。つまるところ、Hughes は、市民的徳の涵養を重視する徳倫理学の観点から、ENH が民主的社会変革を下支えする可能性を示し、もってモラル・エンハンスメントの正当化事由と為すわけである。

### 文献

Hughes, J. 2004, *Citizen Cyborg*. Westview Press.

——— 2012, "After Happiness, Cyborg Virtue," *Free Inquiry* 32 (1).

——— 2015, "Moral Enhancement Requires Multiple Virtues," *Cambridge Quarterly of Healthcare Ethics* 24(1).